

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 黒住 真

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



漢文と和文の世界観

黒住 真 (Kurozumi Makoto)

近世から近代への変化——四書五経と古事記

2016 7/6 16:50-18:35

グローバル化による変化——国を超えた古典

2016 7/13 16:50-18:35

学術俯瞰講義 古典は語りかける2016年度Sセメスター第13回
 駒場 21 KOMCEE レクチャーホール

0. 幕末から近代へ

(1) 後期水戸学

会沢正志斎 (1782-1863)、藤田東湖 (1806-1855)

(2) 横井小楠(1809-1869)

『国是三論』、天地公共有生の心、→由利公正 (ゆりきみまさ 1829-1909)

(3) 五箇条の誓文と宸翰

(4) 教育勅語 1890M23 発布・大日本帝国憲法 1889M22 公布、1890M23 施行

- ・中村正直 (1832-1891)、易、天地人観をとらえる。
- ・勅語・大日本帝国における「朕」

1. 「近代」日本の営み——非宗教観と癒着する判断

・「文明開化」と称される現象に向けて、日本では、島国故に結集が早く総動員の動きを教育や政治の体制において作った。また宗教にも関わっている。

- ・近代日本における判断する天地は無いが、また非宗教国家が形成され、それに諸宗教・思想が位置付かされる。

(1) 大日本帝国憲法へ

1881 (M14). 2. 3-16 神道大会議 cf 『明治国学発生史の研究』藤井貞文

1889 (M22). 2 大日本帝国憲法発布(90. 11 施行) 地方大都市に。また帝国大学。

1890 (M23) 10. 30 教育勅語 11. 25 帝国議会 1

1891 (M24). 1 内村鑑三「不敬事件」 12. 18 田中正造足尾銅山鉍毒質問書、議会 2

1893 (M26). 4 井上哲次郎『教育と宗教の衝突』

以上は、法制上の結集だが、さらに実際の人間の動員と結び付く。

(2) 日清戦争とその後

1894 (M27) 7-1895 (M28) 4 日清戦争

- ・大西祝 (1864-1900) による権力論批判論 ↓

1896M29 年 11 月「社会主義の必要」『六合雑誌』第 191 号、

1896M29 年 12 月「理性の意義を論ず」『宗教』第 62 号、

1901 (M34) 03 内村鑑三『無教会』

04 幸徳秋水『帝國主義廿世紀之怪物』

05 社会民主党結成、即日禁止。

12. 10 田中正造 [1841-1913 (T2) 9. 4] 直訴

・「我は所謂愛国心が、醇乎たる同情惻隱の心に非ざるを悲しむ。何となれば愛国心の愛する所は、自家の国土に限れば也。自家の国人に限れば也。他国を愛せずして唯だ自国を愛する者は、他人を愛せずして唯だ自家一身を愛する者也。浮華なる名譽を愛する也、利益の壟断を愛する也。公と云ふ可けんや。私ならずと云ふ可けんや。」幸徳秋水『帝國主義』警醒社 1901. 04 (7頁)

- ・正造は、近世の「富士講」出身者でもある。その講からは天皇(天照)にも訴える論が出て来る。が、それは当然認められない。
- ・近世までの「天地」が思考としても解体し始めていることが判る。

- ・ 社会民主党の党是には、人類皆同胞・階級撤廃などとある。
- ・ 当時のインテリ若者の自殺：
 - ・ 「悠々たる哉、天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからんとす。ホレーシヨの哲学竟に何等のオースリテーを価するものぞ。万有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」。我この恨を懷て煩悶終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。」藤村操「巖頭之感」1903
 なお、ホレーシヨ、この天地の間には、われわれの哲学ではとうてい考えおよばぬことがたくさんあるのだ（「ハムレット」第1幕第5場三神勲訳）
 - ・ 「至誠の結論は天地の空白虚無を觀じて自らこの世界を去つて一切と交渉を断つに至らしむ。この覚了なる、その前に君国何かあらん、親と兄弟と朋友と何かあらん。我れあに父母に乞ひて生れ来らんや、君国に誓ひて生れ来らんや。君国の恩は我等が無垢の児心に小学校教員が刻み込みたる迷信にあらずや。この迷信を脱却して自我本然(ほんねん)の純なる中心の声を聞かんがために要せし苦心はそも幾何(いくばく)なりけん。誰かなほ君父の空名を備ひ来つて死の一念をひるがへさしめんとするや、人の尊厳はその自由にして外物の支配を受けざるにありと悟らずや。」魚住折蘆「自殺論」1904
 ↓
 - ・ 「人の尊厳」「自由」を「外物の支配を受けない」ものだ、とする。
 →内面主義の強調だともいえる。この「天地空白虚無を觀ず」も近世や宗教から考えると変である。
 藤村操 (1886-1903)・魚住折蘆 (1883-1910)
 - ・ 夏目漱石 (1867-1916) の「即天去私」ではない。ウイリアム・ジェイムズ (1842-1910) を好む。

(3) 日露戦争とその後

- 1904 (M37) 02. 6 日露戦争-1905 (M38) 09. 5 小崎弘道 (1856-38) など協力表明。
- 1910 (M43) 06 幸徳秋水・管野スガ、逮捕。08 「日韓併合」、12 大審院、24 人死刑判決
 - ・ 「時代閉塞の現状」石川 啄木 (いしかわたくぼく 1886-1912. 4. 13)、
 08. 22-23 「自己主張の思想としての自然主義」東京朝日、魚住折蘆 (うおずみ・せつお、1883-1910)
- 1911 (M44) 01. 24 執行幸徳ら 11 人死刑
 02 幸徳秋水『基督抹殺論』 と 02 西田幾多郎『善の研究』
 ↓
- ・ 哲学・文学・宗教の「内面化」 ←『大学とは何か』(叢書・ユニベルシタス ; 539) *The idea of the university: a reexamination*, 1992 ヤーロスラフ・ペリカン (Jaroslav Pelikan 1923-) 田口 孝夫、法政大学出版局, 1996.7
 ←*The idea of a university by Newman, John Henry, 1801-1890*
 ニューマンの大学論や神学は一方でよく読まれていた。
 ↓
- 1912 (M45/T1). 2 「三教会同」
 - ・ 近代における「宗教」の近代「帝国」との結合、→「戦時の軍国化」

(4) 民本主義から震災・恐慌・軍国へ

- ・ 大正期、民本主義も展開するが (吉野作造 1878-1933)、
 ↓
- ・ 関東大震災 (1923T12) における「流言蜚語」(寺田寅彦[1878-1935]1924T13年九月『東京日日新聞』,
 ↓ 清水幾太郎[1907-1988]による著 1937S12年)
 ↓
 恐慌を経て
 ↓
 軍国化する。
 ↑
 鈴木大拙 (1870-1966)、西田幾多郎 (1870-1945) = 「無」「純粹経験」「場所」「大地」
 W. ジェイムズ

2. 「近代化」のマイナス面をみるとどうか

- ・「近代化」のプラスだけ見ようとし(明治・大正の進展だけを見る)マイナス面を見ないのではなく、マイナス面をも見るなら、どう考えられるか。

①大日本帝国の天皇像と言説

- ・天皇(「朕」)を中心に国民(「臣民」)の結集が計られた急速な集結。そこにおける文明開化。
↑↓
- ・明治最初の「五箇条御誓文」1868 慶応4=明治初年
- ・廃仏毀釈と天皇・神道の純化・中心化 → 天皇のエンペラー化。神道の国教化と宣伝の癒着。
↓
- ・明治15年頃、「神道大会議」があり、
中心に向かう神道の「無宗教化」と、民衆神道を含む他の諸思想・宗教の「宗教化」の構造が確定する。
- ・「大日本帝国憲法」1889M22 公布、「教育勅語」1890M23 勅令。
↑中村正直(1832-1891M24)案、受容されず。
- ・二つの言説
 - α 五箇条の誓文 → 横井小楠・中村正直系、天地観、易をも含む。
 - β 大日本帝国憲法・教育勅語 → 水戸学系神道の無宗教的な朕中心化。上下観に収束。
βの傾向がおもに「近代」を主に動かしたことは明か。

② 社会・理性という問題

- ・明治前期にはすぐ問題が生まれないが、
↓
- 日清戦争(1894M27～)後、日露戦争(1904M37～)頃から、公害も含む「社会」「理性」問題が発生する。
徳富 蘇峰(1863-1957) vs. 大西祝(1864-1900)
↓
- 「社会主義の必要」『六合雑誌』第191号、1896M29年11月
「理性の意義を論ず」『宗教』第62号、1896M29年12月
- ・1901M34年、12月、田中正造(1841-1913)、直訴事件
- ・1901M34年、5月、社会民主党結党、即日禁止処分。
- ・戦争・文明化に向けて、自立した組織形成は排除され、上意下達組織が拡大化。

③戦後における指摘

- ・ドイツに対しての海外からの指摘
カッシーラー(Ernst Cassirer, 1874-1945)『国家の神話』The myth of the state, 1946
エーリッヒ・フロム(Erich Seligmann Fromm, 1900-1980)『自由からの逃走』Escape from Freedom, 1941
権威主義や虚無感への依存・収斂・逃避という問題
- ・日本における戦前・戦後の指摘
大西祝(1864-1900)、岩下壮一(1889-1940)も異様な「権威」支配を日清・戦前に指摘する。
田辺元(1885-1962)『懺悔道の哲学』1946
大熊信行(1893-1977)『国家はどこへ行く』1948
丸山眞男(1914-1996) 政治思想家による「責任体制」等。
「超国家主義の論理と心理」を『世界』1946年5月号
『現代政治の思想と行動』(未来社)1956～57年
『日本の思想』1961、「座標軸の喪失」等。第三章 思想のあり方について→「タコツボ型」「ササラ型」
玉野井芳郎(1918-1985) 社会思想家による指摘。
『近代日本を考える：日本のインテレクチュアル・ヒストリー』
有沢広巳・玉野井芳郎編, 東洋経済新報社, 1973.9
大正デモクラシー知が失われたその問題における「権力化」の動向をとらえる。
Cf. 渡辺浩『日本政治思想史 近世』「威力」「武威」による支配。

3. 戦後における戦前把握の解消

(1)戦争・罪責という問題の空白化

- ・戦争における社会的判断の空白化・権力化の問題は、戦後十分把握されたとはあまり考えられない。
クェーカー（非戦平和主義）エリザベス・ヴァイニング（1902-1999）による皇太子（今上天皇）教育（1946-1950）などの展開。

田辺元（1885-1962）『懺悔道としての哲学』1948、

大熊信行（1893-1977）『戦争責任論』1947、『国家悪の——戦争責任はだれのものか』1957

丸山眞男（1914-1996）『現代政治の思想と行動』（敗戦後執筆、1956-7刊）その他、あるが、

↓

- ・朝鮮戦争（1950-1953）のアメリカ依存型成長への展開によって、罪責論や平和論は実際には国内では消えたといつてよい。
- ・1960年代頃、一部のキリスト教・仏教の内部で問題が浮上するが、社会的にはプラスに把握され、曖昧なまま。
中根千枝（1926-）『タテ社会の人間関係』1967
土居健郎（1920-2009）『甘えの構造』1971
- ・大学紛争前後、問題の拡大以前の指摘といえる。
連合赤軍 山岳ベース事件、浅間山荘事件、日本赤軍事件、国際的テロ

(2)以上をどう考えられるか。

- ・天地ないし自然法的な思考が、かなり解体して、そこに資本や軍事が変わって展開する。
- ・判断する社会的組織が無いことが、風評・流言に帰着することになっている。
- ・軍事国家したのも上位二点の「欠如」故に、止まらないことだったのだろう。
- ・これについては、「所以然の故」を失い、「所当然の則」を決める判断的組織の近代的形成の欠如による、といえる。

4. 現代日本において現れた課題

(1)エネルギー所有の問題

- ・1970年頃から、（原爆だけでなく）原子力問題が発生する。
- ・ただ、多くの「日本人」は（私もそうだが）問題として考えなかった。
- ・地下鉄サリン事件 「教養」の解体
- ・今、2011. 3. 11以後[東日本大震災また原子力事故により]、遑って問題がヨリ現れ出ている、といえる。
この問題を空白化・視野から消すべきではない、と発表者は考えている。
ただ、東大に関わっていてその後、知ったこと→ある莫大な分配がいくつもの場所にあったようだ。
またメディアの展開がまたあったこと。

(2) 問題の指摘：

高木仁三郎（1938-2000）、現代における人間の異様な「傲慢さ」を神話として見出している。

山本義隆（1841-）の科学史 生命への畏敬を失い、左右の無い全体主義だ、と見ている。

↓

近現代におけるエネルギー所有の資本主義運動が、近世とは違った、取り憑かれた状態の展開になっている。

■これらをどう考えられるか■

- ① 原子力の場合、太陽光の爆発を、地球上で行なおうとしているもので、エネルギー所有の拡大と拡散物の膨大は、地球全体の構造からいって、異常なもの。
- ② これに結合した、人間における文明・階級格差、また人口増大と生物多様性の異常な減少がある。
↑
- ③ インターネットと結び付いての「国際化」
環境に基づいて判断する社会的組織の自立性、国家を超えた社会関係の必要性・重要性。
- ④ 環境コスモスを超える人間の傲慢さへの自覚、謙虚な位置付けを持つことの大事さ。
こうしことが21世紀に課題として現れている、と考えられる。

■可能性としての国を超えた、漢文・和文■

- ① 近世においては必ずしも国家に収束しない、漢文があつて和文があつた。
EUにおいても、ラテン語があつて各々の口語があるように。その前提を、消すのではなく知るといい。
 - ② そこには、元来持つ天地人、天人相関がある。それを失っている異様さを知ってその妥当性を知るべき。
そのためには「情」と共にそれだけではなく「理」をより持つべきである。
 - ③ 畏敬感の喪失による傲慢、そこでの資本・金融という力に取り憑かれるという問題を自覚すべき。
 - ④ 近世にはある程度始まっていた、社会的判断、組合（ゲゼルシャフト）、による合意生活、死生に関わる社会的組織の自立性、それを消すのではなく再考・再生すべきこと。
歌合わせ、合議、茶会、講
 - ⑤ その古典は、ナショナリズムを超えた、漢文をも含む、また断片資料をも含み、地球的な関係にも繋がる、またただ宣伝ではない、歴史的な永遠性に繋がるものとして形成されるだろう。
- そこに漢文も和文も関わると位置付くだろう。 そのことの大事さが生まれている、といえる。

・ 所以然と所当然——朱子学における理の性格をめぐる、藤原静郎、九州大・中国哲学論集20、1994. 10
 ・ 文化史から見た「天地」「幸福」「愛」—日本における在り方と近現代、黒住眞、東京大・地域文化研究
 専攻 紀要20号、2016. 3

1. 現在を文化史・思想的に再把握してみる

(1) 西洋中世、東洋日本の近世まで

・西欧中世まで：

西欧、ギリシア思想の影響：諸存在は、単なる物体でも記号でもなく、根本的には「生命」を持つもの。
ギリシアの動植物観、中世においても物事（被造物）を「生命」(la Vida)
『トマスの生命論：近代性の根源からオルテガの「生の哲学」へ』マヌエル・サンチェス・デル・ボスケ
Una raíz de la modernidad: : Doctrina Tomista Sobre la Vida 1985、マヌエル・アモロス・水戸博之訳
1995)。

・近代以前東洋思想：

「霊・理・気」理先気後、気先理後、 気＝生命力の働き

(2) 近代——唯物論の中心化と活物論の周縁化・内面化：その生活形態の変容

① 17世紀以後における「物」

自然科学・物理学における、ニュートン（1643-1727）の「物」
vs.ゲーテ（1749-1832）の有機体論・活物観 Vitalismからの原型・中核観

② 18世紀、19世紀前半まで

- ・カント（1724-1804）、人格性への尊厳
- ・19世紀以後表の世界における「唯物論信仰」vs.「内面」の心理学
- ・経済論・生活論：大きな循環ないし作用の中での所有、
二宮尊徳（1787-1856）、19世紀前半まで、ゴミの無い世界。
イギリスのアダム・スミス（Adam Smith 1723 - 1790、「見えざる手」(invisible hand)
『国富論』第4編第2章）
ジョン・ラスキン（John Ruskin 1819-1900）。

伊藤邦武『経済学の哲学：19世紀経済思想とラスキン』2011

③ 天地・コスモスの構造の解体と所有——19世紀半ばから

天地・コスモスの構造の乗り越え。神の生滅。
所有され市場めがけて資産運営される「もの」。
vs. マルクス（1818-1883）の自然哲学・資本論、唯物論。

↓

経済論がかく変容したにせよ、20世紀前半までは、動植物を切り取り石炭・石油・ガスを自然の中から
得る営みは、やはり大体はまだ自然の循環の中にある。だからゴミもまだあまり大きくは無かった。

(3) 現代——人間における生の拡大と諸物の破壊、エネルギー所有の運動

ジンメル（1858-1918）「生の哲学」

シュバイツァー（1875-1965）、「生命への畏敬」(Ehrfrucht zum dem Leben)

レイチェル・カーソン（1907-1964）、環境破壊、動植物水の流れ破壊の問題のつよい指摘。

20世紀後半、1960～70年代における原子力の拡充・発電と事故の発生

（日本、1963. 10. 26 東海村で最初の原子力発電より）

原発事故：スリーマイル 1979. 3、チェルノブイリ 1986. 4、福島 2011. 3. 11 など。

↑

原発とその事故の鳥瞰

- ・エネルギーの巨大な所有と破壊物(塵)の莫大な発生、地球上全体に異様な状態。
- ・人間における資本を含めた所有欲。

2 自然エネルギーにおける社会的組織とは

倫理を、人間の生き方——生や行動や営為の、仕方・捉え方・営み方だと、考えておく。すると、倫理への問いは、結局はいまの人間——いま・生きている自分たちに、収束していく。その問いの結果は、重要なことに他物・後代にまで広く深く繋がる。だから、そこには、大きな「責任」が含まれている。しかも、その問い自体は、結局は、動植物たちまた以後の生者や以前の死者たちに向かわず、いまの人間にこそ向かう。責任という倫理は、生きている自分たちに収束する。その働きゆえに担われる内容はとても大きい。

↓

人間の〔科学技術による〕組織形成

ハンス・ヨナス (Hans Jonas, 1903–1993)

『責任という原理:科学技術文明のための倫理学の試み』原板Das Prinzip Verantwortung1979、和訳2000、第1章「人間の行為の本質は変わった」、第2章「基礎問題と方法問題」

第3章「自然現実性と妥当性：目的問題から価値問題へ」

・人間には、未来にも関わる「存在擁護への責務」があり、身勝手な/排他的な「人間中心主義」を超えるべき「倫理的・形而上学的問い」が大事。

・自然からの要請：「価値の持つ拘束性・根拠づけ」として「自然」とその「目的」
「自然は、価値に依存することで価値を裁可する権威を持つようになり、また自然は、われわれや自然の中に住まうすべての知識を持つ意志によって価値が承認されるよう要求」。(訳p. 135)

「自然は目的を宿している。だから、価値も宿している。したがって、価値から離れた自然など考えられない」。(訳p. 135)

↓

(動植物をも含む自然がもつ目的・価値は、われわれがそれを承認することが要請されている)。

「核エネルギー」論

ヨナス：

「大いに歓迎すべき贈り物」だが、
「この贈り物がダナエ人の贈り物〔トロイアの木馬〕にならないかどうかは、もっぱらわれわれにかかっている」。「いつか核融合が授けられるならば、エネルギー問題を永久に解決できるかもしれない」
「不確実性がわれわれの永続的な運命であるかもしれない」(訳p. 327-8)。

高木仁三郎：

ほとんど根源悪を見ている(4. 1)。
ヨナスは、不確実性をみている。私自身は、高木に組する。

「自然」「社会」の非形成と形成

一九世紀半ば以後、人間における「社会」、生きる人間相互の格差、人口の増化が発生+「科学技術」「文明」
妥当な判断における社会的組織。

近代日本：「国家」また官僚の営み+議会・出版+宣伝・広告・メディア

「社会」的組織として、「国際」また「自然」を目的として持つものとしては不十分だったのでは？。

cf. 大正末期、関東大震災(1923 大正 12)

清水幾太郎(1907-1988)、震災体験→『流言蜚語』日本評論社 1937年(昭和 12年)。

丸山眞男(1914-1996)、無責任体制(『日本政治思想史研究』1952)

↓

「自然とも結びついた自立した社会的組織」の形成が、近現代日本では不十分だった。
これを形成する方向が求められている。

3. 考えられる課題・形態・方向——地球化における自然・生命関係における生活

現在、さらに指摘し考えたいのは、「地球化」というべき問題である。20世紀、人間の人為的生活形態、社会的国家的組織が形成され続け、また人口も爆発的に増加している。

■20世紀末ごろからの人間における課題：

- ① 原子力の場合、太陽光の爆発を、地球上で行なおうとしているもので、エネルギー所有の拡大と拡散物の膨大は、地球全体の構造からいって、異常なもの。
 - ② これに結合した、人間における文明・階級格差、また人口増大と生物多様性の異常な減少がある。
 - ③ インターネットと結び付いての「国際化」
環境に基づいて判断する社会的組織の自立性、国家を超えた社会関係の必要性・重要性。
 - ④ 環境コスモスを超える人間の傲慢さへの自覚、謙虚な位置付けを持つことの大事さ。
- こうしたことが21世紀に課題として現れている、と考えられる。

↓

■求められる在り方：

- ① 国家枠を越えるインターネット・交通による国際化・地球化があり、これに向かう必要がある。
- ② エネルギー・力の所有・専有が結びついて発達し原発はこれを支えているかのようだ。がこれを変換して、自然と関わり循環型社会を形成する必要がある。
- ③ 自然における生物多様性のさらなる解体と環境の変容・破壊の増大が生じている。これを減少させ、環境に關与する生活・経済等の様態を形成する必要がある。
現在の人間は、昔の人から見るならば、傲岸きわまりないのではないだろうか。ならば、
- ④ 人間は、グローバル化に関与しつつ、自身の、可能性・完全性・不完全性・偶然性を知り、自然的宇宙とも地球環境とも結びついた倫理・哲学・宗教を循環型生活において再発見すべきである。
これは、ニュートンがとらえる構造の展開だけでなく、ゲーテがとらえた構造をさらに見出すべきことになる。
- ⑤ 消えてしまった/逆に刺戟によって動かし拡充させられてしまう、活物観・産霊さらなる靈性（「いのち」）を、妥当な形で再発見し、これをめぐって、自然的秩序としての地球の中にあつての人の営みの構造を見出すこと。ということは、文字通り中間的組織としての「教会」「寺社」の形成、また諸生活形態として成長よりもある程度アーミッシュ（Amish）に近い生活、これらを情報の形成と共に見出すこと。
20世紀末・21世紀初めの事件は、そのような社会的組織の形成を教えているようである。